

学科内学会による「援助者養成教育」の実践

山田 美穂, 村中由紀子, 堤幸一 (教育心理学科)

A Report of Training Education for the Human Service Profession by a Learned Society of the Department of Educational Psychology.

Miho YAMADA, Yukiko MURANAKA, and Koichi TSUTSUMI
(Department of Educational Psychology)

抄録

2011年に発足した就実大学教育心理学会は、母体である教育心理学科の教育課題に応じてその活動範囲を徐々に広げ、事業を展開している。本稿では、2013年の新事業である研修旅行「研修タイム」およびなでしこ祭「ハートカフェ」の実践について報告する。これら二つの実践に共通するのは、双方向的・多方向的な対話を通じた学びという点であり、参加者からはおおむね良好な評価が得られた。肯定的なコミュニケーションのトレーニングや、居心地の良い空間づくりという体験は、援助者としての基本的な資質の育成につながるものである。学科内学会という授業外の枠組みを活かして、よりきめ細やかな工夫を重ねながら、続けていくべき実践であると考えられる。

キーワード：援助者養成 対話を通じた学び 肯定的なコミュニケーション 学科内学会

I 企画・実践に至る経緯

1 「就実大学教育心理学会」の沿革・活動目的

就実大学教育心理学会は、2011年4月、教育心理学科新設と同時に発足した。以下、略称である「就心会」と表記する。

過去2年間は、第1・2期生（低学年次生）と教員（大半が新任者）のみの構成であることから、学科全体の成熟のペースに合わせて活動の幅を広げていくという方針のもと、学会報（学科報）の作成と講演会の開催を二本柱として、学会活動を行ってきた。学会報が学科報との合同編集であることにも表れているように、大学院生や卒業生もまだいない中、「学科内学会」という形態を活かした独自の活動を展開するには至っておらず、存在意義を模索している段階にあった。

2 学科が抱えていた教育課題

2011年秋、複数の科目の授業中の小テスト等の実施時に、不正行為が行われているという情報が相次いだ。授業担当者による注意指導、緊急学年集会での注意指導やレポート課